

## 東京農業大学ブロード・ピーク登山1991

佐藤正倫

1986年に崑崙山脈7,167m峰登山を行ってから、我々の志向は当然ヒマラヤへと向けられるようになった。その後、チョー・オユーとチョモランマなどで何人かは高所登山の経験を得ることができ、そして我々の目論みとしては、1989年、ナンガパルバットのバリエーション・ルートにおいて長期間にわたって独自の登山を展開する中で、より多くの隊員が高所登山の本質を体験、理解し、願わくば登頂する、それで大学創立100周年と重なる1991年にここ数年の結集としてより大きな登山を行なう、ということであった。しかし、思惑通りには事は進まないもので、ナンガパルバットでの失敗と遭難による主力メンバー2名の欠落は我々には致命的といえ、もはやそれをやるだけの力はどこにも無かったのである。かといえ、せっかく勢いづいた雰囲気は消してしまうのは惜しいし、例のごとく農大で8,000m峰には是非登りたいと思っている。そして大学から援助金が貰えそうだという吉報もあり、行かない手はない。そこで持ち上がってきた計画が、ブロード・ピーク(8,047m)なのである。

ルートは、1957年にヘルマン・ブールらが初登頂した西稜で、我々は全員登頂を目標の大前提とした。登山期間はバルトロ氷河のキャラバン日数を除いた実質登山日数として、6月初旬から8月初旬の60日程とした。

隊構成は、隊長に早坂敬二郎(44才)、隊員は八幡敏正(41才)、小笠原岩雄(38才)、佐藤正倫(27才)、谷川太郎(24才)、加藤和夫(62才)の6名で加藤を除く5名が登攀隊員である。パキスタン人は、陸軍の連絡官1名、コック1名、キッチンボーイ1名の計3名、総勢9名の隊となった。

精鋭であるわけがなく体力や経験にも個人差がある5人が全員登頂をしようとすれば、タクティクスは自然と極地法に近いものになる。上部キャンプのキャンプ1(C1)からキャンプ4(C4)までをそれぞれ固定し5人の1パーティーで同一行動で荷上げとルート工作をキャンプごとに繰り返すというものだ。

休養は3日行動に対して2日休養を大体の目安としたが、キャンプ間の移動が短時間で可能なこのルートでは上部での休養はできるだけ避けて滞在日数を減らし、ベースキャンプ(BC)へ下りて休養をとるよう心掛けた。

また各キャンプ建設(荷上げ完了)後もBCへ下り、十分な休養をとるようにした。フィックスト・ロープも持参し、必要な箇所には固定することとし、C4においては睡眠用酸素(AMP)を毎分0.5ℓ使用することとした。

いくら易しいと言われても、そこはやはりヒマラヤの8,000m峰である。自然の猛威の前には人間は無力なのだ。侮らずに余裕のあるタクティクスと装備、食糧で対処した。

## 2. 海外登山の実践と今後の課題

5月14日、イスラマバードに到着後、装備、食糧などの買い出し、ブリーフィング等手慣れた仕事をこなし23日、スカルドへ移動する。

ここでも生鮮食品やポータ支給の食糧や燃料を買いだしてすべての荷物を揃え、キャラバン用に梱包する。それは思っていた以上に多かったようで不手際もあったがこの作業に丸2日も費してしまった。

スカルドからジープ7台に荷物と共に分乗してホトに到着する。27日、雇用したポーター180人という大所帯を従えて、ここホトより少々悦に入りながらのキャラバン開始である。アスコーレ、バルディマルと経由したのちパイユで1日休養となり、ポーターへ食糧、装備を支給する。好天に恵まれたキャラバンは、バルトロの研ぎ澄まされた峰々を間近に眺めながら、腰までの徒渉もあったりと何とも素晴らしいものである。リゴをほどなく過ぎたあたりで前方の彼方にやっとブロードピークを望むことができた。その迫力は、他を圧倒しているようだ。

ガッシュブルム4峰を正面に見据えるコンコルディアを左に折れてゴドウィンオースチン氷河をK2の懐を目指すかのように進み、6月4日、BC(4,900m)に到着する。

全員調子は良く、ここまでは順調といえる。

2日間をBC建設と準備に充てることにする。

すでに西麓ではイエティ同人隊が活動しており、ルート状況や彼らの固定したフィックスト、ロープの使用などについて意見交換を行なう。

7日、ようやく登山開始である。まずBCから氷河を遡り良い所で中央モレーンに移ってさらにそれをしばらく遡ってから氷河を横断する。そして尾根を左へ回り込むようにガレ場を歩くと取付点である。そこからフィックスト・ロープに導かれ所々氷壁を登るとテント跡に出る。我々はさらに1時間、傾斜のきつくなった氷壁を登ってトラバースした所の尾根上をC1(5,750m)とする。C1へは都合4回の荷上げを行ない、BCで1日の休養後、C2への荷上げの為、14日C1へ入る。数日前入山したパキスタン・ドイツ両陸軍合同隊とイエティ同人隊らと一緒にの行動となり、日本語、英語、独語、ウルデュ語が飛び交う賑やかな登高となったが、狭いC1は窮屈でこの先が思いやられる。C1からC2は標高差600mで3時間余りで行くことが可能だ。C1より尾根右側のルンゼ状斜面を登り、岩の凹角を抜けると尾根に出る。尾根は雪がなくボロボロで非常に歩きにくい。ここを20分程歩くときれいに整理してある6,250mのテント跡であるが、まだ行けるということでその上の6,350mをC2とし荷物をデポする。15日から3日間荷上げを繰り返し、17日荷上げ後BCへ下る。それにしてもルート工作はC3近くまで済んでいるとのことで、我々は歩荷登山に従事しそうな気配である。天候は悪天へと変わり始め、BCでの3日間は間断なく降雪に見舞われた。しかし、我々の行動は好天周期とうまく一致し、最後まで悪天による停滞を上部キャンプでされなかったのは幸運であった。この頃、新たに東京スキー山岳会隊と国際隊もやって来て、ブロードピークは何やら国際キャンプの様相

## 2. 海外登山の実践と今後の課題

を呈してきた。

まだ悪天が明けきれない21日、C3目指して出発する。23日C2では、6,000m以上で最初の滞在もあってか皆一様に動きに冴えが無いが、強風についてテントを出る。岩稜と雪壁を過ぎるとゆるやかな雪稜となるが、記録とは違い全面に氷が露出しており、フィクスト・ロープ無しでは歩行も怖いくらいだ。雪稜が台地状になるあたりでルートは右に大きく迂回し、80m程の氷壁を登って西稜上に出る。

さらに易しい岩稜の上がC3(6,900m)である。迂回する箇所から氷壁上部まで250mのロープを固定する。24日も強風の中、C3への荷上げとルート整備を完了させる。そして、BCでの休養を終え28日出発、30日C3入り、7月1日と2日に最後の仕上げとしてC4の建設へと向かう。C3周辺は寒気を伴った南西の風が相変わらず強く、我々の行動を阻もうとするが、これが幸いしてか懸念されたラッセルは脛くらい、C3から約3時間でセラック下部にある僅かな平坦地に達することができ、そこをC4(7,450m)とする。さらに7,600m付近のセラック帯通過のルートを確認し、アタック態勢を整える。

3日からはまた悪天となり、BCでの休養中の我々は好き勝手に放題であったが、我々と入れ替わってC3に入り虎視眈眈と頂上窺っていたイニティ同人隊はまったく動けずに諦めることになった。フィクスト・ロープの恩恵を受け、一か月余り友情を交わした彼らの不運の敗退は我々にとってもつらかった。

10日、彼等の分もという思いを秘め、快晴の中、満を持して出発する。C2、C4を2日で登り、12日アタックの朝を迎える。酸素のせいも皆、食欲もあり調子は良さそうだ。4時10分、まだ暗い中テントを飛び出す。セラック帯を素早く抜け主峰と中央峰のコルへと続く雪面に出る。雪は深くなく快調である。途中のクレバスに20mのロープを固定する。また赤旗も立てながら進む。低酸素と闘いながらの登高であり、山のスケールは大きくなかなか近づけない。徐々に傾斜がきつくなるコル直下に50mのロープを固定し、7時30分コル着。激しいブリザードが顔面を直撃する。

コルよりナイフリッジとなり、残置ロープに70mのロープを結び固定し、慎重に行く。

尾根は広くなり左の中国側に雪庇が張り出して、雪は時々深くなる。チムニー状岩峰の登りに50mロープを固定して雪壁を登り続けると前峰に着く。この頃より天気は一変しガスに包まれ視界が効かなくなる。ここから尾根は水平なガレ場歩きとなり、ホワイトアウトの中、尾根の一部ではなからうかという頂上に11時20分、あっけなく登頂する。写真を撮影し、ビデオを撮っている間に後続の隊員も次々と登頂し、ここに全員登頂が成った。

初期の目的を達成したこの登山は、当然成功であったと思う。しかし今回のそれは単に8,000m峰でブロードピークに登頂することだけのための行為であって、現代の登山レベルと比較すれば何ら評

## 2. 海外登山の実践と今後の課題

価されることはない。

べつにそのことを特別に意識しているつもりもないのだが、登山を終わってみて物足りなさを感じたのは事実である。キャラバンでは、雪も寄せつけないガッシャブルム4峰西壁やマッシャブルムに驚き、BCでは毎日K2を仰がされた。そして帰路立ち寄ったナンガパルバットでは、サンナビキ同人がルパール壁を登攀中であつた。それらを見るにつけどうしても我々の登山はかすんでしまうのである。

登山技術や装備、情報などあらゆる発達によつて8,000m峰全山を登るのはさして問題ではなくなった感のある今、アルパインスタイルなどの登山形式にこだわり、より難しいルートを求めていくのは自然の成り行きであると思う。そしてそこには、経験によつて裏付けされた真の実力が必要である。それは易しいルートを登っているだけでは分からない、厳しい登攀を自らが繰り返し経験することを得られるものであると思うし、その本質をよく把握することによつて身に付く力だと思ふ。

とにかく実践あるのみである。

(東京農業大学OB)